

大学出版

15
号
'92
夏



大学出版部協会

Association
of
Japanese University
Presses

北海道大学図書刊行会

Hokkaido University Press

聖学院大学出版会

Seigakuin University Press

慶應通信

Keio Tsushin Co., Ltd.

産能大学出版部

The SANNO Institute of Management

玉川大学出版部

Tamagawa University Press

中央大学出版部

Chuo University Press

東海大学出版会

Tokai University Press

東京大学出版会

University of Tokyo Press

東京電機大学出版局

Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会

Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会

Science University of Tokyo Press

法政大学出版局

Hosei University Press

放送大学教育振興会

The Society for the Promotion of
the University of the Air

明星大学出版部

Meisei University Press

早稲田大学出版部

Waseda University Press

名古屋大学出版会

The University of Nagoya Press

京都大学学術出版会

Kyoto University Press

大阪経済法科大学出版部

Osaka University of Economics and Law Press

関西大学出版部

Kansai University Press

九州大学出版会

Kyushu University Press



大学出版
15号

Summer · 1992

読書の周辺 大学生の文章力	安本 美典	1
——「軽いノリ」で論文を書こう——		
読書の周辺 「ピューリタニズムを読む」	大木 英夫	5
——戦後さまざまな出会い——		
二十一世紀の学術市場と大学図書館・業者の役割	渡辺 成男	9
大学出版部ニュース		13
新刊案内'92・4〜7		18
大学出版部協会のキャッチフレーズ		24
製作の現場から		表 3

大学出版部協会マーク・デザイン 道吉 剛

本小冊子中の表示価格は、税込みです。

大学生の文章力

—「軽いノリ」で論文を書こう—

安本美典

(産能大学教授)

1

むかしの学生と、いまの学生と、平均して、どちらが文章力があるのだろうか。

むかしなら、手紙で書くところを、いまは、電話ですましてしまう。

テレビが、すっかり普及して、映像的なもの、感覚的なものに対しては、センスをもっているにしても、ことばで、深く考える能力は、むかしより現在の学生のほうが、おとっているのではないか。

むかしの学生のほうが、文章力はあった。このように思っている年配の人は、すくなくないはずである。

私も、いつのまにか、「中・高年層」に属しかけてきたので、心のどこかに、むかしの人のほうが、文章力があつた、と考えたい傾向をもっている。

しかし、日ごろ、大学で、学生たちと接していると、彼らには、文章力はある。ただ、むかしの人のような「文体」で書けないだけだ、という感じがしてきている。

年配の人には、「書きことば」と「話しことば」とのあいだには、あるていどの乖離かいりがあると感じている人が多いはずだ。そのため、「話しことば」とは別に、「書きことば」の習練が必要であると思う傾向がある。

いっぽう、若い人たちは、「書きことば」と「話しことば」とのへだたりを、あまり大きいとは、感じていないことがすくなくない。口語体の文章は、完全にふつうのこととなり、さらには、椎名誠などの、「昭和軽薄体」などといわれた文体も普及した。

そのため、学生たちの文章をみると、いわゆる「軽いノリ」で書いたものには、抜群に面白いものがすくなくない。そして、いわゆる「作文」とか、「論文」とかを書かせると、手こずって書けないことが多い。

「軽いノリ」の文章では、輝く才能を發揮した学生が、「論文」を書かせると、これが同じ学生の文章か、と思わせるほど、精彩を失ってしまうことがある。

彼らにとつては、「軽いノリ」の文章と、「作文」「論文」の文章とのあいだには、年配の人にとつての、「口語文」と「文語文」とのあいだほどの、へだたがりがあるのではないか。

2

いくつか、例をあげよう。

二、三年まえ、俵万智さんの『サラダ記念日』が、ベストセラーになった。

『サラダ記念日』は、短歌を、「書きことば」から、「話しことば」にする革命であった。俵さんは、その意味で、時代の生んだ革命児であり、『サラダ記念日』は、その記念碑である。

『サラダ記念日』を、読ませ、ディスカッションさせ、その上で、『サラダ記念日』にならって短歌をつくらせたならば、若い人たちの創作力に、かならず目をみはるはずである。大学生ならば、数々の傑作が、一教室から、いくつもでてくるはずである。

私のいまいる大学では、一年生のときに、「教養ゼミ」という時間がある。担任の教員は、そこで、一応、なにをやってもよいことになっている。

私は、その時間に、『サラダ記念日』も、とりあげてみた。家で読んでこさせ、簡単な感想文を書かせ、さらに、「この本がなぜベストセラーになったのか」など、いくつかのディスカッション・ポイントを定めて、グループ討議をさせた。討論の結果を、グループごとに発表させたのちに、作歌コンクールを行った。

家で作ってこさせたのであるが、つぎの歌などは、時期が時期だけに、私の胸には、鋭くくいこんだ。

「隣国の 大動乱を知りながら 短歌を作る 幸せな人」(金山二郎君)

このレベルの歌が、いくつもでてくる。

むかし風の短歌のスタイルでは、若い人たちは、歌うことができない。しかし、俵万智さん風にであれば、彼らは、自由に歌うことができる。『サラダ記念日』には、若い人たちの創作力を解放するなにかがある。

『源氏物語』などを読めば、和歌は、もともと、日常生活のなかで、贈答歌や、語りかけの形で用いられていた。当時の口語表現と密着していた。

俵万智さんの革命は、文語表現化してきた短歌を、口語表現にもどすころみといえるだろう。

3

いますこし例をあげよう。

私は、大学で、「広告・宣伝論」の専門ゼミをもっている。ゼミの時間に、学生たちに、輪番で、『アドバルーン』というミニコミ誌をつくってこさせている。

最近、ワープロも普及し、機能も充実しているので、なかなかシャレた感じのミニコミ誌をつくってくる。

つぎの文は、その『アドバルーン』に載っていた文章の一節である。

「恥」名前

私の名前は、吉田聡といいます。といっても『湘爆』の作者ではありません。

話は高校3年の秋に戻ります。

私は産能大学経営情報学部経営学科を受けるべく準備を

進めました。必要な書類を揃え、勉強もそれなりのこと
をしました。とりあえず当大学に無事合格しました。

そしてその年の正月、担任からきた年賀状の宛名に
は、お世辞にもうまいとは言えない字で吉田恥様と書
かれており、一瞬、我が目を疑いましたが、恥は明らか
に恥と書かれていました。

後日そのことを担任に言うると、『あっ、そうかこれ
じゃあはじだやな〜わり〜わり〜』ちっとも悪びれず、
おまけに『ずう〜と、恥だとおもってたよ。大学にだし
た書類あるだろう、全部、吉田恥で出しちゃった。わ
り〜わり〜それでよく受かったな。わっはっは。』と
言った具合です。

今となつては、これで良かったのか疑問が残ります
が、自分の息子に恥なんてつける親がどこにいるんだ。
ちよつと考えりや分るじゃねえか。こんなので合格させ
ちまう大学も大学だ。

もう一度言います。私の名前は、吉田聡です。と
いっても『湘爆』の作者ではありません。(吉田聡君)
また、つぎのような散文詩も『アドバルーン』に載って
いたものである。

「悪趣味」という題の一連の散文詩で、女子学生が書い
たものの一節である。

筋肉痛

最初にお断りしておきますが、別に私は変態ではあり

ません。ただ、筋肉痛が好きなだけ。あのビビッとくる
痛さがたまらない。全身を探してもどこにも筋肉なんか
ないんじゃないかというほど運動オンチの私、ちよつと
身体を動かした翌朝はもう大変！快感に浸ってます。」

(鈴木文生さん)

あげだすとときりががない。いまひとつだけ、別の女子学生
が、自作の『アドバルーン』の冒頭に書いていた文を引用
してみよう。

「雑誌をつくる。つくるからには、ウケたい！」という
のが嘘偽らざる本心であります。

これが商業雑誌なら、「ウケたい！」に「売りたい！」と
いう色気がつけ加えられるのでしようが、幸か不幸か
ADBALLON は非売品なので、私の「ウケたい！」は
混りけなし、純度一〇〇%の欲求といえましょう。

ところが人生とは皮肉なもので、ウケを狙って頑張れ
ば頑張るほど相手の気持はしらけていく。

気に入られるにはどうしたらいいか？ などと考えだ
したが最後、心理的に相手の支配下に陥って、主体性や
オリジナリティーなどというものは永遠に失われてしま
います。そこで、最善の策と思われるのは、とにかく自
分自身が楽しむこと。初めての ADBALLON へっぴ。
めいっばい楽しむつもりです。

そして、めったにない幸運ではあるけれども、願わく
ば送り手の楽しみと受け手の楽しみが、ほんの一瞬でも

合致せんことを！」(壺井雅子さん)

4

私の勤めている大学は、いわゆる偏差値がメチャクチャに高いという大学ではない。

また、以上にあげた文章は、文学部の学生が書いたものでもない。いわば、ごく普通の平均的な大学生の書いた文章である。そして私は、これらの文章が、水準以下の文章であるとは思えない。しかも、この水準の文章であれば、ほとんどいくらでも例があげられる。要するに、書きたい文章を書かせれば、それなりの文章を書くのだ。

私は、『アドバルーン』などを作らせてみて、まったくさまざまな個性をもつ面白い文章が、つきつきと出てくるので、びっくりした。ゼミが楽しみである。

才華が咲きみだれる花園に来たような感じである。むかしの学生より、はるかに個性的なのではないか。

もし、学生たちが、「作文」や「論文」を書きにくがるようであれば、ひとつの方法は「作文」や「論文」も、「軽いノリ」の文章で書くことを許すことであろう。

曾野綾子さんと上野千鶴子さんとの論争で曾野さんは、上野さんの文章を、「品のない文章」と批判しておられたが、上野さんの文章は、「軽いノリ」をとり入れた文章のように思える。

『朝日ジャーナル』は、読まれなくなり、『SPA!』などが、好んで読まれる時代なのだ。また、ワープロを、筆記

具がわりに使える学生のふえてきた時代なのだ。

学生に、口述筆記をたのむと、ほんのすこしゆっくりていどの口述を、ワープロで、ちゃんといってくる学生がいる。講義ノートを、ワープロでとれる学生もいる。ファミコンゲームなどで、指先がきたえられた結果なのだろうか。また、漫画や写真を挿入したり、「♡」「!!」などの符号を使ったがるのも、彼らの文章の特徴だ。

「教育」の英語の「エデュケーション」は、もともと「引き出す」という意味であるという。

学生に迎合するのではなく、うまく、「引き出す」ならば、最近の大学生の文章力も、端倪たんげいすべからざるものがあるようにみえる。

「最近の大学生は、文章が書けない」という声も聞く。それは、あるいは、こちらがあらかじめ定めた文体スタイルの枠なかで、文章を書かせようとするからではないか。その枠のために、学生の文章力の個性と生気が失われる。

これからは、高度な内容をもつ論文なども「軽いノリ」の文章で書く人が、ふえてくるだろう。そして、そのような本のほうが、従来の文体スタイルで書いたものよりも、より多くの読者を獲得するだろう。

同じ内容を伝えるのであれば、「軽いノリ」の文体に、特に弊害があるとも思えない。

時代は動きつつあるのだ。

文章の革命も、進行しつつあるのだ。

「ピューリタニズムを読む」

戦後さまざまに出会い——

大木英夫

(学校法人聖学院理事長 聖学院大学出版会会長)

一九七八年に早稲田大学出版部から出された『自由民への訴え——ピューリタン革命文書選』(渋谷浩訳)を、二十冊あまりも買った。ひよっとするとこの類の書物は版を重ねることがないのではないかと恐れからもあったが、それよりもこのような書物が出たことを知ったとき、福音書の天国のたとえ——畑の中にかくされた宝を知って、「喜びのあまり、行って持ち物をみな売りはらい、その畑を買う」というたとえ——のように、「喜びのあまり」の衝動からであった。

わたしがピューリタニズムを知るようになったのは、一九五四〜五六年国際基督教大学に來たチューリッヒ大学の有名な神学者エーミル・ブルンナーを通してであった。わたしは彼の助手だった。

ブルンナーに奨められて、一九五八〜六〇年、ニュー

ヨークのユニオン神学大学院でラインホルド・ニーバーのもとで学ぶことになった。ブルンナーも若い頃ユニオンに留学した。その後ブルンナーは「ピルグリム・ファーズ」について小さな本 (*Die Denkwürdige Geschichte der Mayflower-pilgeräter*, 1920) を書いた。その本をユニオンの図書館で発見した時、不思議な思想的再会を覚えたものだった。

そのユニオンでピューリタニズムの原資料を読むことになる。振り返ってみると、それは敗戦後の荒涼たる東京から高層ビルのそそり立つニューヨークにやってきたほどに長大な放物線の航跡をうしろに感じさせるものであった。わたしは、東京陸軍幼年学校最上級生として敗戦を迎えた。賀川豊彦に接したのがきっかけで、キリスト者となり、しかも牧師の道に進んだ。小さな人間の中のこととはいえ決して小さな変化ではなかった。

この変化の中で、課題は、プロテスタンティズムとデモクラシーという戦後のわたしをとらえた二つの流れをつきとめるということであった。それによって、戦後に生きる自己を確立できるのではないか、と思ったからである。

この二つの流れが、十七世紀のピューリタニズムにおいて結びついている。それがブルンナーから教えられたことであった。ブルンナーの助手として、トレルチを読まねばならなかった。トレルチの大著『社会教説』(*Soziallehren*) や『近代世界の成立にたいするプロテスタンティズムの意

義』は、ブルンナーの教えを裏づけるものであった。

イエリネックという名が出てくるのは、これもブルンナーの本で、早稲田の昔の教授酒枝義旗の訳書『正義』（一九五二年）においてであったが、イエリネックの名のもとでわたしは東京神学大学の新約聖書学教授山谷省吾先生と、不思議な交わりを経験することとなった。山谷先生は旧三高の法制経済の教授をされた方で、大塚久雄教授もその教えを受けた先生である。この先生は独学で、新約学の教授にまでなられた。しかしそのむかし、イエリネックに興味をもたれた独法の学者であった。美濃部達吉訳『人権宣言集』の所在は、たしか山谷先生から聞き、神田の古本屋で見つけ、入手した。これは最近みず書房から初宿正典氏の新しい訳で出版された。

『自由民への訴え』というデモクラシーの源流、正確に言えば、人権理念の源流を発見し、そこへと注意を喚起したのは、イエリネックのこの本であった。この本の価値は大きい。しかし、それは日本でどれ位認識されているだろうか。初宿氏の訳本も今は品切れで重版の話を聞かない。

日本ではマックス・ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の〈精神〉』が有名だが、ヴェーバーとか、先にあげたトレルチとかに、ピューリタニズムへの関心をひき起こしたのは、イエリネックであったことはあまり知られていないようだ。その当時イエリネックやヴェーバーやトレルチは、ハイデルベルクの同僚であった。日本

ではイエリネックは法学関係、ヴェーバーは経済学関係、トレルチは歴史や神学関係と、バラバラに関心をもたれてきたが、このハイデルベルクの交わりは、三者の相互関係を示すものである。イエリネックは、その三者のうち、もっとも先輩であった。

ニューヨークのユニオンの図書館にあるピューリタニズムの原資料とは、マカルピン・コレクションとよばれるものである。そこに行くまで何の予備知識もなかったのも、それを知るのも偶然な出会いであった。このコレクションはあの「源流」のアメリカ最大のダムのようなものであった。ロンドンのブリティッシュ・ミュージアムの「トマソン・コレクション」にはかなわないが、それでも大したものである。

このコレクションを用いて、ハーラーの有名な二つのピューリタニズム研究（*The Rise of Puritanism, 1938. Liberty and Reformation in the Puritan Revolution, 1955.*）が書かれた。これはユニオンの図書館の特別のケイジの中にあり、わたしはアルバイトでその中にはいり、整理の仕事をしたが、どのパンフレットの貸出しカードにもハーラーの署名があったのには驚いた。このコレクションを用いて、ハーラーやドン・ウォルフのファクシミリ資料集が出された。ハーラーはコロンビア大学のバーナード・カレッジ（女子大学）の教授であった。ニーバー夫人はそこで教えた。ラインホルド・ニーバーがピューリタニズム

に関心をもつのに、ハーラーとの関係がある。

ユニオンは、コロンビアとブロードウェイをはさんだ反対側にある。一九五八年七月一五日（と記してある）コロンビアの本屋で、ウッドハウス編の Puritanism and Liberty があるのを見つけ、この時も留學生の貧しい全財産をはたかようにしてそれを入手した。その頃の本は、貴重な文献のひとつで、図書館で何度もリニューして手もとに置く努力をした程であった。そこには、クロムエルの革命軍内部の「パトニー会議」の記録（クラーク文書）のリプリントが含まれている。この資料集に序文を書いたのが A・D・リンゼイであった。日本で、キリスト者の間では、彼の父トーマス・リンゼイの『ルーテルの生涯とその事業』が藤井武の訳で知らされていたが、A・D・リンゼイは知って大へんな存在と分かった。わたしは一九六六年ジュネーブで或る会議に出たあと、オックスフォードを訪れたが、リンゼイが長く学長をしたペリオール・カレジの前の本屋ブラックウェルに入り、リンゼイの本を聞いた。本屋の主人はリンゼイのファンで、東洋から来た人間がリンゼイを言うのに驚き、店内からリンゼイの本を何冊か探し出してくれた。その一冊が The Modern Democratic State, 1955 である。

イエリネックがハイデルベルクからはるかに指さした「源流」を、リンゼイは本国人としてその流れに根をおろして育った思想の大木のような存在であった。永岡薫氏の

訳『民主主義の本質』（最近その増補版が未来社から出た）がそれを完璧に表現している。ウッドハウスの本で知ったリンゼイの存在がこうして日本訳されたこと（初版は一九六四年）を知ることが、これまた再会の喜びであった。

イエリネックとリンゼイ、この二人によって、あの戦後の宿題を負ったわたしは、ピューリタニズムとデモクラシーの「源流」へと導かれて行った。イエリネックがピューリタニズムを指示したのは、人権理念を一般的にフランス革命に由来せしめることの「常識」の誤りを訂正するためであった。リンゼイは、ウッドハウスの本の序文で（フランス革命のスローガンである）「自由・平等・兄弟愛が、もしその宗教的文脈から切り離されるならば、安価なものとなり、浅はかなものになり、容易に論駁されることになろう」と書いた。

人権理念がピューリタンのな宗教的背景をもつものであることを認めることは、デモクラシーの認識とその実践の困難さにわれわれを直面させることになるであろう。しかし近ごろのピューリタン革命の歴史研究家たちは、革命の宗教的背景を真剣に考慮しはじめている。宗教的背景、それはたとえて言えば、氷山の水面下にかくれた部分に似ている。突出部分の現象的認識だけではその深層文脈が無視されてしまう。

一九六六年のことに戻るが、ブリティッシュ・ミュゼアムの近くのキューカー関係の建物で、ジョフラー・ナトール

教授に会った。今年ナトールの *The Holy Spirit in Puritan Faith and Experience*, (1946, '47) の新しい版が出た。まさに現象の背後の目に見えない世界が探究されている。ナトールは、リンゼイとは別の学風ながら、ピューリタニズム理解の確かな導き手である。

宗教的背景の深さと大きさを探るといふ課題との関連でたとえばヴェーバーも参照する「ウェストミンスター信仰告白」も重要なものである。歴史関係の間では、日本にもウェストミンスター信仰告白を、あたかも金科玉条のように尊重しているプロテスタントの一教派があることを知らない人々が多いと思う。これはピューリタン革命時代の産物であるが、このような宗教的文献も、ただその文言上の理解にとどまるべきではないことは言うまでもない。ところで、ユニオンの図書館のマカルピン・コレクションがウェストミンスター信仰告白の背景の理解のため、ユニオンに購入されたということも、記憶されてよいことであろう。ブリッグスという新約学の教授が前世紀末にユニオンで教えた。その頃ウェストミンスター信仰告白に関する議論が起こり、ブリッグスは「異端」として糾弾されるということがあった。ブリッグスの師は、教会史家として有名なシャフであった。シャフはスイス生れ、チュービンゲンで教育を受け、アメリカに来て、ユニオンの教授となった。シャフは弟子ブリッグスの弁護に立った。ブリッグスはウェストミンスター信仰告白を文言上で理解するのでは

なく、その歴史的背景からとらえるべきだと考えて、このマカルピン・コレクションをあつめる役を買った。それから半世紀後、ハーラーは、ミルトンの『アレオパジティカ』の背景を知ろうとして、このコレクションを学んだのである。

二年前、アルシュ・サミットで——それはフランス革命二百年記念の年であった——ミッテランとサッチャーとが、人権理念の本家争いみたいな議論をした。そのフランス革命二百年を記念するかのように、東欧がくずれ出し、やがてソ連が消滅した。リンゼイは、ウッドハウスの本の再版（一九五四年）のためにこういう序文を書いた。「本書の研究が今や新しい重要性を帯びることとなった。それは、東ヨーロッパに全く新奇なデモクラシーの理念が発生し、それが広がりだしたからである。西欧的デモクラシーの独特な諸性格は、東欧のいわゆる『人民民主主義』とは全く別種のものであって、それはわたしの知る限り他のどのような書よりも本書を研究することによって理解され得るものである」。それから四十有余年、リンゼイの言葉を今日の世界は新しく聞かねばならないように思われる。

この伝統を受け継ぐ大学が日本にあってよいという思いが、聖学院大学建設の理念と実行となったのは、この世界的変動の数年前であった。

二十一世紀の学術市場と大学図書館・業者の役割

渡辺 成男

(丸善株式会社首都圏本部本部長補佐)

平成十二年といえど西暦二〇〇〇年、二十一世紀である。残すところ、あと八年である。

現代が高度情報化時代とも云われ、社会に起こりつつある多くの変化は学術出版物に対する需要にも変化を与えている。その中でも大きな影響を与えた要因に高等教育の拡大とニューメディア及びコンピュータ等エレクトロニクスの技術革新が数えられよう。

前号(十四号)において、データ等を含めわが国の大学市場の全体像が紹介されたので、今回は視点をかえて、未来に向っての課題について、多少大上段にふりかぶって我が身をかえりみず述べてみたい。それは、「未来の学術市場にチャレンジする基本的条件は何か」ということである。

近年、知識の量が短期間で倍増してきている事実をもつ

て「知識の爆発」とも呼ばれているが、学術出版物もまた多数刊行され、媒体も印刷体からマイクロフィルム、ビデオ、CD-ROM、データベース等々種々に分化して市場に出現してきている。データベースを例にとれば、一九七五年から一九九一年に至る間のそれは次の如く報告されている。

データベース数 二十五倍(三〇一より七、六三七に)

レコード件数 七十八倍(五千二百万件より四十億六千万件に)

我々学術文献を取り扱う業者は本来の任務から、こうした変化を傍観していることは許されない。

一 技術革新のスピードと図書館のコンピュータ化

今日ほど情報があふれ、その発生量、種類においても多く、媒体の多様化も急速に進んでいる時代はかつてない。そういう状況の中であって、これまでの図書館は資料を収集、整理し、ユーザーの求めに応じて提供するといった、どちらかというところ“運営”に重点をおいた型で貢献してきたと云えよう。しかし、今後求められる機能はそうした伝統的な専門的知識と技術を備えた体制に加え、もっとダイナミックな知識・情報自体を有力なソースとして価値を生み出す“情報の発信基地”の役割を果たすことを求められてくるのではないか。

学術審議会が本年六月十五日、文部大臣に提出した中間報告「二十一世紀を展望した学術研究の総合的推進方策について」の中で“学術研究情報流通体制の整備”に関する項目を設け、その中で“大学図書館の機能強化”を目的実現の必要条件にし、国際的学術研究情報ネットワークへの参加検討を提言している。

— 技術革新は加速化の一途をたどる —

エレクトロニクス技術の進歩は五年で十倍、十年で百倍というのが常識だそうである。食品にしてもその他の製品

にしても、かつてのように大量生産大量販売の図式が通用せず、多品種少量生産を余儀なくされている。これに対応するには、エレクトロニクスを中心とする技術の利用が不可欠となる。特に我々のように販売活動の中心を学術文献においている者には、その必要を感じている。本は一般商品と異なる点が多い。例えば商品価値は消費者個人によって相当異なり、一般商品のような画一的広告宣伝の展開が難しい。学術出版物のように専門分野が細分化しているものは特にそうである。求めた情報が素早く手に入れられ、かつ、多角的なネットワークに蓄積された情報を自由に利用できるようにすることこそ、今後大事になってくる。

— 図書館コンピュータ化の促進 —

日頃営業活動を通じて図書館と接触している我々は、館自身がどのようなコンセプトで情報活動の活性化を図っているのか。ニューメディア等の導入も含め自館のコンピュータ化、システム化の促進をその手段、方法においてどのようにしようとしているのかに無関心ではいられない。これは各種業務との接点——図書館サイドの発注、受入、整理。業者サイドでは受注、納品、付帯業務に対応——においても密接な関連をもっているからである。

業務の生産性向上は双方に共通するボトルネックの解消にある。共に、成長と発展をめざすには共同作業も必要に

なってくるのではないか。我々はすでに各種図書館のシステム化に参画しビジネスとして全国で一〇〇館に及ぶ実績をあげてきている。

これも近年の情報技術の急速な発達によりシステム化の実現が可能となってきたからである。

二 ニーズの多様化と高度化

大学を中心とする高度な研究と教育は、人々の生活空間を変え、文化的経験を拡大してきたことを認めるものである。こうした貢献というものも専門的学術書の刊行があらはじめて実現が可能だったのであり、今後この戦略的役割は媒体がいかように変化していかうと変らないのではないか。

益々地球的規模での情報交換が必要になってきており、情報の量が増えるだけでなく、モノを情報・知識の塊かたまりに変えていく、いわゆる情報化社会では大学の機能も変化拡大していく。今後大学は情報化、国際化、教育の自由化等の波をさけて通れないと云われている。その対応策は、情報化、国際化の拠点として機能することであり、教育内容、教育方法、カリキュラム、研究体制の整備等の進展に伴ない社会的機能の拡大も見込まれている。

当然その実現には付加価値を生み出す資源としての情報

に対する需要も益々多様化し、高度化してくることが予測される。それらのニーズに対する情報供給基地として図書館の果たす役割は重要になってくるのではないか。

今回の学術審中間報告でも大学図書館の学術研究情報ネットワークの活用と図書資料等の計画的かつ重点的収集に努めることと同時に生涯学習活動の普及に伴なうサービス機能の充実についても検討するよう提言している。

全国国公私立大学の図書館資料購入の商品別変化をみると次の如くになっている。

	洋書	外雑	和書	和雑	その他	計
1985年	100	100	100	100	100	100
1986 "	93	102	105	105	108	101
1987 "	109	102	109	106	130	108
1988 "	99	107	115	119	123	108
1989 "	107	110	118	123	130	113
1990 "	110	126	118	130	148	120

※ 1985年(昭和60年)を指数100とした。

「その他」の伸び率が一九八五年に対し一九九〇年は一四八と高さがトップである。これはニューメディア関係の購入が大きく影響しているようだ。我々の営業データもほぼ同様の傾向を示している。

— 迅速な供給体制の必要 —

学術情報センターの情報ネットワークの高速化、学内LANの整備、データベースのサービスマン充実等々、学術研究情報ネットワークの高速化・国際化を図ることが国家的支援の下に進められることになれば、また、学術情報の量的・質的多様化に対応するためには、必然的に体制の整備が促進されるだろう。

これら情報の原資料、文献入手の迅速化が要求され、我々業者もその需要に応える供給体制をつくっていかねればならない。迅速な供給と多角的ネットワーク体制への対応が需要の多様化と高度化の到来の中で生き残る条件となろう。さもなくば、転業か廃業かの決断をせまられることになるだろう。

三 今後の課題と生涯教育体制

人間というのは二十年以上同じ職業に就いていると、その職業に感謝するようになる、という言葉がある。

顧客に対する一貫したサービスと供給体制、そしてそこから得る信頼と信用、この築き上げた関係が「職業に感謝する」ことの基礎になるということだろう。

エレクトロニクス技術の革新の加速化とニーズの多様化と高度化に対処するには、それらの潮流に耐え得る供給体制を構築しなければならない。すでに現在でも、ソフト、ハードの商品の取り扱いの増加に伴ないニューメディアからシステムまでの最新技術の習得、トレーニング等社員の質的向上への投資も相当している。従来の情報提供、商品供給に加え、それらの改善とアフターサービス、コンサルティングまで多岐にわたる業務範囲の拡大がある。そして、各々の業務が専門性を高く求められており、人材の育成は急務である。短期間に達成できるものではなく、長期的計画の中でコストをかけて行なわなければならない。

常時、変化する技術、ソフトの理解に対応していくという上昇志向は、我々業者にも厳しくおしよせてきている。このことは、生涯教育体制に組み込まれていくことを意識しており、積極的に受け入れて新しい時代の営業活動を志向していきたい。

特に、学術専門書の専門出版元である大学出版部の出版物普及には協力を惜みません。

北海道大学図書刊行会

■地球環境会議が開催され、環境問題への関心がますます高まるなか、本年二月に日生財団助成を得て刊行した畠山武道『アメリカの環境保護法』(A5・五九七四円)が発売三カ月で早くも五〇〇部増刷の運びとなった。類書がないとはいえ本格的な専門書が結構なテンポで売れるのも、やはり時代の流れなの

大学出版部ニュース

慶應通信

野村隆夫編著『産業社会の変容——国際比較の視点から』(三八一円)本書は編者(千葉商科大学教授)の論文に加えて、同大学の竹内壮一・小島真・伊藤公一・斉藤壽彦、更に石川博友・杉岡碩夫・大石剛・森野勝好・鈴木孝男・伊藤正昭・山田弘志の各氏が、編者の古希を記念して執筆している。筆者の多

だろう。五月新刊の辻井達一他著『新版・北海道の樹』(四六判・二四七二円)、原松次編著『札幌の植物』(B5・三九一四円)も出足好調で、後者は六月に増刷。その他、小野有五・五十嵐八枝子著『北海道の自然史』(A5・二四七二円)、川瀬清著『森からのおくりもの』(四六判・一六四八円)、俵浩三著『緑の文化史』(四六判・一六四八円)等類書も着実な売行きを見せている。

聖学院大学出版会

▼昨年四月に出版会が設置された今年の四月より出版活動を開始いたしました。大学出版部協会にも、四月の総会で加盟が承認され、名実ともに大学出版会の一員となりました。

▼鶴沼裕子『史料による日本キリスト教史』(四六判並製、一五〇〇円)、キリシタン時代から、現代まで、日本におけるキ

リスト教の受容と展開を素描した歴史篇と、原史料から日本のキリスト教を読みとく史料篇の二篇からなる入門書。

▼W・パネンベルク『キリスト教社会倫理』(四六判上製、二六〇〇円)ドイツの神学者、W・パネンベルクが論ずる社会倫理学。倫理的規範がゆらぐ現代の倫理的危機状況を認識しながら、法、倫理の基礎づけ、政治権力、平和、人類統一の問題を神学を基盤に論じている。

産能大学出版部

ソニー会長の盛田昭夫氏の論文「日本型経営が危い」が経営者の中に議論を巻き起こした。

この議論にマネジメントの立場からの改革を提案したのが「自己革新のマネジメント」(早津明彦著、定価二千円)である。

生産優位の時代から生活優位の社会への大転換期の中で、マネジメントはどう考え、行動し

なければならぬのか。社会・企業・個人の共生は、どうすれば実現するのかを追求した人間感覚あふれるマネジメント論。

時間管理はいつの時代でも変わらぬビジネスマンの中心テーマである。「時間管理学」(L・セイバルト著、上野俊一訳、定価千八百円)は、日常の行動スタイルをチェックし、短期から長期までの時間管理を手帳の活用例を合わせて示した極めて実用的な一冊。

玉川大学出版部

▼R・バーンバウム（高橋靖直訳）『大学経営とリーダーシップ』（四九四四円）高等教育機関はどのように機能しているのか、そのシステムのパターンを分類づけし、大学の管理運営に携わる大学人が出会う様々な状況への対処の仕方を提案する。

▼多田建次『学び舎の誕生―近世日本の学習諸相』（二五七五

大学出版部ニュース

東海大学出版会

▼「思春期」や「叫び」など、十九世紀末の不安を象徴するような絵で有名なムンクは、この二つの作品の印象があまりに強いせいか、画業の全容や伝記的な側面となるとそれほど知られていない。

一八六三年、ノルウェーのルーテン生れ。父親は陸軍の軍医だった。幼い時から病弱だった

円）江戸時代に誕生した武士教育と庶民教育を考察し、日本の近代化は徳川期の教育に起点を求めることができると、その本質的な欠陥をもそのまま明治以降の教育に胚胎させたとする。

▼前田清志『日本の水車と文化』（三二九六円）七世紀の伝来以来、木製水車技術を発展させてきた歴史を追う一方、詩歌・工芸品の題材・意匠として愛でられてきた様子を紹介し、日本人の深層に流れる精神性を探る。

ムンクは、父のすすめで工業学校に進んだもののリューマチ熱で断念、王立画学校に転ずる。

十七歳になったばかりだった。ムンクの足跡をたどり、その実像を描き出す（三木宮彦著『ムンクの時代』二八八四円）

▼事務所を移転しました。東海大学本部（渋谷区富ヶ谷）のある校舎内。小田急線代々木八幡駅、地下鉄代々木公園駅、井の頭線駒場東大前駅、どの駅下車でも徒歩10分。お立寄り下さい。

中央大学出版部

〈学内紀要の原稿料を改定〉出版部において受託出版を行う紀要（研究所、大学院を除く）は、従来、原稿料を判型の別なく一律、各雑誌組上がり1頁当たり1千円（長期間据置き）となっていたが、本年4月以降入稿する紀要の原稿料を次の通り改定した。

それぞれ組上がり1頁当たり

A5判は1千500円、B5判は2千円。また、日本人が欧文で執筆した場合と外国人が和文で執筆した場合、A5判は2千円、B5判は2千800円とした。



紀要類の例示

東京大学出版会

新しいシリーズの刊行が次々と開始されて活況を呈している。まず、荒野泰典・石井正敏・村井章介編『アジアのなかの日本史』（全6巻）は、従来の国家・国境の枠を超えて広くアジアの諸民族・諸地域との比較の中で新しい日本史像を打ち立てようとするもので、既刊は①アジアと日本、②外交と戦争。

つづいて、脇本平也・柳川啓一編『現代宗教学』（全4巻）は、宗教ブームの現代に、グローバルに広がった宗教現象を科学の視点で見つめるもので、①宗教体験への接近、②宗教思想と言葉、が既刊。

さらに、佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編『学校の再生をめざして』（全3巻）は、今日の危機に瀕した学校をどうするかという真剣な問い直しで、①学校を問う、②教室の改革、が発売中。

東京電機大学出版局

ネットワーク社会に移行し、「ISDN」が普及すると「家庭の電話機がコンピュータの端末になる」と言われた著者がいた。コンピュータアレルギーの人にとって空恐ろしく聞こえるかもしれない。が、既に私達はコンピュータの恩恵を受けて生活している。炊飯器も洗濯機もコンピュータを搭載しているの

大学出版部ニュース

東京理科大学出版会

月刊誌「SUT」は理大の英文名の頭文字で、中堅諸先生の熱心な編集にかかり、卒業生の業績をも多数紹介し、学生にはその進むべき方向に示唆を与えている。次に全国高校図書館長先生からのご通信を紹介する。文科系出身者や自然科学に弱い者にとってまことにヒエキするところが多い。女子高生の興味

である。むしろ「コンピュータの端末が電話機なみに使いやすくなる」と捉えていいと思う。

高機能を人に扱いやすくすることは、一方において技術者にとって高い知識が問われることになる。『ISDN技術シリーズ』は、この高度に集約された技術分野を理解する技術者を育成し、この分野のすそ野を広げることが社会的急務であるという考えから刊行された。全4巻のうち3巻まで刊行されている。

をひくようなたとえれば生活とか環境とかに関する特集を組んでほしい。文化祭クラブ活動などが必要な折に活用するケースもあるため、バックナンバーも保管して利用に備えている。なお、担当者の立場から「科学教養雑誌」として続けていただきたい。理科大学全般のことがよくわかる。

定価五七〇円
年間五一五〇円

東京農業大学出版会

◆大谷 忠著『イタリアの農業と文化』（A5判一六七ページ 定価一六〇〇円）

著者は本学の助教授で、専攻は家畜管理と草地学である。イタリアという国は、牧草の改良に関する研究が、他の国よりも先輩格であることもあって、九百年の歴史をもつイタリアのボローニア大学に留学した。

法政大学出版局

D・ロτζ 『パフチン以後——ヘポリフォニー』としての小説』伊藤誓訳／四六判・三六〇五円
▼：ロτζが八〇年代に行なった講演や書評などを集めたもので、全十三章から成っている。
：前半六章で展開される小説言語をめぐる鋭い分析は、単にロτζの批評の頂点を示すだけでなく、現在の物語論が望みう

留学中には、勉強の合間を縫ってイタリアの各地に足を運びながら、農業の実情見聞、とりわけワイン、チーズ、オリブと云った食文化にも関心を示し、積極的に探求した模様。そうしたイタリアでの体験を農大通信講座の機関誌「テルス」に連載・執筆していたが、それを編集・収録したものであるが、イタリアのいろんなことを簡潔にまとめられている。イタリアの旅行案内書でもあろう。

る最良の成果のひとつとみることができよう。：ロτζがイギリス小説のポリフォニーを分析する際に最も訝えをみせるのは、自由間接話法の陰影を、小説家の眼によって余すところなく掬い取っている箇所だ。本書を読む最大の楽しみは、このロτζの「緻密な読み」に導かれ、読者がテクストとの「対話」を始める瞬間にあるとも言ってもよい。：（池田栄一氏評）
季刊『リテレール』創刊号より

放送大学教育振興会

▼来春三月に刊行を予定している図書は八十三点。トータルで約三百名におよぶ執筆陣は、暑さにもかかわらず、脱稿に向けて、また校正にと奮闘中。▼執筆者二十三名を擁しての『アフリカ論』や十五名による『現代産業技術』や十三名編成の『変動する日本社会』・『自然と科学―生命編』もあれば、一方、『近世日本と

オランダ』（金井圓）、『インドの思想』（川崎信定）、『日本文化論』（尾藤正英）、『芸術の哲学』（渡邊二郎）、『イスラームの歴史』（後藤明）、『環境の健康科学』（小泉明）、その他、ひとりで一冊を書き上げている執筆者も多い。▼徳丸吉彦著『民族音楽学』（一九九一年刊）に第九回田辺尚雄賞が与えられることが決まった。授賞式は、十月三日の東洋音楽学会第43回大会の中で行われる。

明星大学出版部

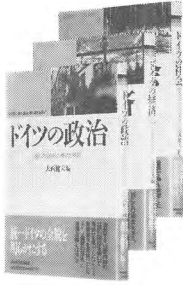
▼明星学苑理事長・明星大学学長児玉三夫先生が、本年喜寿を迎えられるのを祝いし、本学教育学科の教員を中心に二五名の執筆者による『児玉三夫喜寿記念論文集』を企画、出版するのはこびとなった。収録論文は、Ⅰ教育哲学・思想六編、Ⅱ教育史八編、Ⅲ教育制度四編、Ⅳ教育の内容・方法六編である。現

在九月刊行をめざして進行中。▼『中国語基本語用例辞典』明星大学中国語研究会編 A5判五五九ページ 定価三五〇二円『中国語基本語用例辞典』は当所の予定よりページ数の増加装丁の変更等により発行日よりだいぶ遅れた出版となったがようやく完成した。本書は、中国語の初學者のための用例辞典ということもあり、語数も二五〇〇字程度としてあるのが特徴である。

大学出版部 ニュース

早稲田大学出版部

▼各国の全貌を明らかにするシリーズ、ワセダ・リブリ・ムンディの刊行を開始した。第一弾は『ドイツの政治』『ドイツの



経済』『ドイツの社会』（各巻定価二五〇〇円）。最新資料による書下しを集め、ビジネスマンや学生に最適。呈内容案内。

▼『水野祐著作集』（全10巻）の刊行を開始した。第一巻の『日本古代王朝史論序説新版』（定価四五〇〇円）は、著者の代表作。わが国ではじめて「万世一系神聖皇統観」に異議を唱え、「三王朝交替説」を打ち出した水野古代史の根幹をなす理論書。呈内容案内。

名古屋大学出版会

▼A・J・P・テイラー著／井口省吾訳『近代ドイツの辿った道―ルターからヒトラーへ』（定価三六〇五円）ドイツの齎した悲劇の原因を尋ねて、ルターからヒトラーにいたるドイツ近代史の軌道をヨーロッパの視野にたつて点検し、今日のドイツ統一が孕む問題性を鋭く予見した歴史の傑作。

▼ジャック・ルゴフ著／池上俊一訳『中世の夢』（定価二八八四円）夢、驚異、森、荒野、野人、そしてインド洋。西洋中世のイマジネールをアナール学派の泰斗が雄大な規模で論じ、歴史に失われた半身を回復する。

▼R・カンティロン著／津田内匠訳『商業試論』（定価三六〇五円）ケネー、スミス等に多大な影響を与えた政治経済学揺籃期の古典の完全訳。フランス型経済思想の原型を明らかにする。

京都大学術出版会

小会はじめての欧文出版物、

『La Révolution française et la Littérature』(中川久定編、定価四八〇〇円、仏文)を五月二〇日に刊行。二年半前に京都で開催された国際シンポジウム「フランス革命と文学」の発表論文集としてようやく完成。

これまで、革命期の一〇年間
は歴史家の研究対象であり、文

大学出版部ニュース

関西大学出版部

▼上田達三著『産業構造の転換と中小企業』(定価九〇〇〇円)
国民経済の成長発展と自由競争社会の活性化を果たしてきた日本の中小企業への関心が世界的に高まっている今日、本書は中小企業のメッカ・大阪での構造変容の実証分析による成果を日本経済の成長発展、産業構造の転換過程の中に体系づけて考究、

学史家の領分ではないとされてきたことを批判し、五か国、計一六名の研究者たちが、様々な角度からフランス革命期の文学にアプローチしたものの。

国内向けダイレクトメールの反応はまずまず。しかし、本書刊行の意義からして、フランスで普及させねば意味がない。そのため、フランスの書店への委託、『ル・モンド』誌への広告掲載、フランスの学会誌での書評などを、現在模索している。

大阪経済法科大学出版部

◆第1回白頭山国際共同研究調査団編/沢敷監修『白頭山への道』二七〇〇円。

本書は九一年夏季に二日間
にわたって行われた第一回白頭山学術調査団の報告書である。
白頭山は、中国と北朝鮮の国境にまたがってそびえる東アジアでも随一の名山で、一六万年前に造山された。

朝鮮・韓国・中国・日本の四カ国のメンバーで構成された調査団による、様々な学術的観点からの白頭山の実態調査報告書であると共に、延辺朝鮮族自治州及び朝鮮民族の霊山である白頭山へ向かう道程での様々な出来事、風俗を多数の写真やエッセーでも紹介するユニークな構成となっている。

九州大学出版会

▼M・クレッカー&U・トゥヴォルシュカ編『諸宗教の倫理学―その教理と実生活―第一巻 性の倫理』二四七二円。このシリーズは基本的な生活のたぐなかで、宗教が人間の倫理的な行為をどのように形成していくかをテーマ別に概観する。第二巻「労働」、第三巻「健康」、第四巻「所有と貧困」、第五巻「環

境」を逐次翻訳出版予定。▼馬場金太郎・平嶋義宏編『昆虫採集学』本書は発行以来多くの昆虫同好の士に歓迎され、初版は六ヶ月で売切れ、増補して第二版を七月に刊行。六六九五円。▼坂根嘉弘『戦間期農地政策史研究』(四六三五円)平成二年度日本農業経済学会賞受賞。清水展『出来事の民族誌―フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』(五七六八円)日本民族学会・沢沢賞受賞。

新刊案内 '92・4/7

(表示価格は税込みです)

■北海道大学図書刊行会

北海道議会開設運動の研究
Endocrine Chronobiology

広重 力・藤本征一郎・本間研一編 一〇三〇〇円

Physics and Chemistry of Ice

前野紀一・本堂正夫編 一四四二〇円

新版・北海道の樹 辻井達一・梅沢 俊・佐藤孝夫 二四七二円

札幌の植物―目録と分布表 原 松次編著 三九一四円

放射線生物学概論(第三版) 吉井 義一 四六三五円

Salmonid Diseases 木村 喬久編 一〇三〇〇円

北海道農業の思想像 太田原 高昭 二〇六〇円

生体高分子の低温カロリメトリー

ムレヴリンシュヴィリ/上平 恒・上平初穂訳 四六三五円

明治大正期の北海道―写真と目録―

北海道大学附属図書館編 一三三六〇円

■聖学院大学出版会

史料による日本キリスト教史

キリスト教社会倫理

W・パネンベルク 大木英夫/近藤勝彦監訳 二六〇〇円

■慶應通信

新しい時代の幸福論―人生哲学序説―

藤川吉美・周 曉燕 一九五七円

国際連合

産業社会の変貌―国際比較の視点― 加藤 俊作 二五〇〇円

ひとりて学べる統計学入門―行動科学研究のための道具立て― 野村 隆夫 三八一円

並木 博・渡辺 恵子 二五七五円

ソヴェエト政治の歴史と構造―中澤精次郎論文集―(慶應義塾大学
法学研究会草叢書53) 慶應義塾大学法学研究会編 七六二二円

正論自由 第九巻―真・善・美の日本建設―中村 勝範 一八〇〇円

現代の社会変動―世界のなかの日本社会―

十時 嚴周編著 三九一四円

風景的世界の探究―都市・文化・人間・日常生活・社会学―

山岸 健 五三〇〇円

八角塔の窓から 丸山 信 三〇九〇円

こくご☆☆☆指導書―養護学校(精神薄弱教育)

小学部国語教科書指導書― 文部省 七二〇円

こくご☆☆☆指導書―養護学校(精神薄弱教育)

小学部国語教科書指導書― 文部省 六四〇円

さんすう☆☆☆指導書―養護学校(精神薄弱教育)

小学部算数教科書指導書― 文部省 八六〇円

さんすう☆☆☆指導書―養護学校(精神薄弱教育)

小学部算数教科書指導書― 文部省 七〇〇円

■産能大学出版部

企業提携の時代

社員を活かす社長・殺す社長

後藤 光男 三〇〇〇円

吉岡 行雄 一八〇〇円

コミュニケーションンさえうまくいけばマネジメントは必ず成功する

奥富 正孝 一五〇〇円

営業・宣伝のヒット商品広告企画法

山田 理英 一六〇〇円

ピンチはチャンスだ！人生はドラマだ

清水 英雄 一五〇〇円

「人間信用状」のつけ方・活かし方

青木 匡光 一五〇〇円

創造工学入門

中山 正和 二〇〇〇円

自己革新のマネジメント

早津 明彦 二〇〇〇円

働きやすい職場管理

池澤 章雄 一八〇〇円

豊かな人生への自己実現

山田 博夫 一八〇〇円

別れたくなったら

中村安治訳 一五〇〇円

時間管理学

L・セイバルト／上野俊一訳 一八〇〇円

ポジティブ マネジャー

安藤 嘉昭 二六〇〇円

電子ファイル導入マニュアル

玉井 清之・大久保 昌旺 一八〇〇円

ビジョン・マネジメント

上原 樞夫 二〇〇〇円

最新 営業日報戦略活用法

山口 博康 一六〇〇円

現代に甦る日本泳法

鈴木 渚鷗 三八〇〇円

■玉川大学出版部

大学経営とリーダーシップ

H・レールス&H・ショイアール編／訳者代表・天野正治 九七八五円

■中央大学出版部

日本の国際経済政策

地域社会計画と住民生活

ロシア革命と良心の自由

国際民事訴訟の法理

AGING of THE JAPANESE ECONOMY

法律家を目指す諸君へ——一九九二年度版——

アメリカの大法司法システム(A)

増補 美術における右と左

近代日本の形成と宗教問題

体制転換

熊本発地球環境読本

ムンクの時代

ジャガーの足跡

アンデス・アマゾンの宗教と儀礼

確率とランダム変数へパボリス応用確率論①

A・パボリス／中山・町田訳

雲仙・普賢岳大噴火—寛政と平成の記録—

建築家山田守

中央大学経済研究所編 二五七五円

武川 正吾 三九一四円

小杉 末吉 五〇四七円

P・シュロツァー／小島武司編訳 一一三三円

中央大学経済研究所編 二八八四円

中央大学法職講座運営委員会編 一五四五円

小島武司他編 二九八七円

中森義宗他 四一二〇円

中央大学人文科学研究所編 三〇九〇円

中央大学経済研究所編 一五七五円

九州東海大学地球環境問題研究会編 二九八七円

三木 宮彦 二八八四円

友枝啓泰・松本亮三編 三二九六円

三六〇五円

一三三九円

向井 覺 四三二六円

学び舎の誕生—近世日本の学習諸相—

見える学校 見えない教育

現代ドイツ教育学の潮流—W・フリットナー百歳記念論文集—

多田 建次 二五七五円

長谷川義縁 一八五四円

二八八四円

二五七五円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

二八八四円

企業と産業精神衛生〈職場とこころの健康①〉

財団法人精神分析学振興財団編 一二三六円

企業と中高年〈職場とこころの健康②〉

財団法人精神分析学振興財団編 一二三六円

企業と家族〈職場とこころの健康③〉

財団法人精神分析学振興財団編 一二三六円

企業と転動〈職場とこころの健康④〉

財団法人精神分析学振興財団編 一二三六円

個人と性格〈職場とこころの健康⑤〉

財団法人精神分析学振興財団編 一二三六円

六親〈桃園文庫影印叢書〉

金子金治郎解題 二五七五〇円

日本の岩石と鉱物

通産省工業技術院地質調査所編 八二四〇円

第四回底生有孔虫国際シンポジウム議事録(英文)

高柳洋吉・斉藤常正編 一八〇二五円

日本語初級Ⅱ

東海大学留学生教育センター編 二九八七円

■東京大学出版会

ひとつのヨーロッパ

いくつものヨーロッパ 宮島 喬 二四七二円

国際政治の分析枠組

岡部 達味 二八八四円

最適都市を考える

宇沢弘文・堀内行蔵編 三九一四円

中国の経済体制改革

関口尚志・朱紹文・植草益編 六五九二円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇25

帝国国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇25

帝国国会図書館所蔵 一二三六〇円

枢密院会議事録43・昭和篇1

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

Japanese Labor Law

国立公文書館所蔵 一四四二〇円

アジアと日本(アジアのなかの日本史1)

菅野 和夫 一二三六〇円

荒野泰典・石井正敏・村井章介編 三七〇八円

日本中世女性史の研究

脇田 晴子 四九四四円

近代化と伝統的民衆世界

鶴巻 孝雄 六三八六円

現代日本の政策過程

中野 実 二八八四円

源氏物語の論理

篠原 昭二 五六六五円

感情〈認知科学選書24〉

戸田 正直 二四七二円

UNIXワークステーション入門

小林光夫・武市正人・鈴木卓治 三二九六円

精子学

毛利秀雄監修 森沢正昭・星元紀編 一二三六〇円

〔増補〕神経学の源流1

ババンスキー 萬年甫編訳 五一五〇円

〔増補〕神経学の源流2

ラモニ・カハール 萬年甫編訳 五一五〇円

神経学の源流3

ブロカ 萬年甫・岩田誠編訳 五一五〇円

水利の風土性と近代化

志村博康編 五九七四円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇26

帝国国会図書館所蔵 一二三六〇円

帝国議会衆議院委員会速記録・昭和篇26

国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

枢密院会議事録44・昭和篇2

国立公文書館所蔵 一四四二〇円

宗教体験への接近〈現代宗教学1〉

脇本平也・柳川啓一編 二二六六円

現代日本社会7 国際化

東京大学社会科学研究所編 四三二六円

現代日本社会の金融分析

堀内昭義・吉野直行編 三六〇五円

日本企業の海外直接投資

洞口 治夫 四六三五円

アメリカ革命史研究

斎藤 眞 六七九八円

アメリカカ婦人宣教師

小樽山ルイ 四九四四円

東南アジア世界の歴史的位相

石井米雄・辛島昇・和田久徳編 五九七四円

戦間期日本蚕糸業史研究

松村 敏 八七五五円

X線回折・散乱技術 上(物理工学実験15) 菊田惺志 三二九六円
水の気象学(気象の教室3)

武田喬男・上田豊・安田延壽・藤吉康志 二六七八円
抗生物質大要(第四版) 田中信男・中村昭四郎 五六六五円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和編27 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和編27 国立国会図書館所蔵 一六四八〇円

枢密院會議議事録45・昭和篇3 国立公文書館所蔵 一四四二〇円
学校を問う(学校の再生をめざして1) 佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編 一八五四円

教室の改革(学校の再生をめざして2) 佐伯胖・汐見稔幸・佐藤学編 一八五四円
中国医学思想史(東洋叢書7) 石田 秀実 二八八四円

宗教思想と言葉(現代宗教学2) 協本平也・柳川啓一編 二二六六円
外交と戦争(アジアのなかの日本史2) 荒野泰典・石井正敏・村井章介編 三九一四円

何を讀みとるか(憲法と歴史) 樋口陽一 二二六六円
アメリカ現代政治(第二版) 阿部 斉 二二六六円

バイオメカニズムII バイオメカニズム学会編 一八五四〇円
自然科学の統計学(基礎統計学3) 東京大学教養学部統計学教室編 二九八七円

SASによる共分散構造分析(SASで学ぶ統計的データ解析3) 豊田 秀樹 三九一四円
アジア太平洋の国際関係と日本 渡辺 昭夫 三七〇八円

カリフォルニアの米産業 八木 宏典 三九一四円
劉堡(中国東北地方の宗族とその変容) 轟 莉莉 六三八六円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇28 轟 莉莉 六三八六円

帝国議会衆議院委員会議録・昭和編28 国立国会図書館所蔵 一二三六〇円

枢密院會議議事録46・昭和篇4 国立公文書館所蔵 一四四二〇円
Postwar Reconstruction of the Japanese Economy 大来佐武郎監修 五一五〇円

Topics in Primatology, 3 volumes 西田利貞ほか編 二五七五〇円
Zaibatsu 森川 英正 六三八六円

東京電機大学出版局 電気設備技術基準(平成4年改正) 東京電機大学出版局編 八五〇円

電気法規と電気施設管理(3訂版) 竹野正二 二四〇〇円
無線工学B(2陸技1・2総通受験教室) ④吉川忠久 二五八〇円

図解 溶接の技術読本(2訂版) 應和俊雄・上田敬三郎 二九八七円
システム監査試験の徹底研究(第3版) 日本ユニシスシステム監査研究会 二二六六円

公開鍵暗号系(情報科学セミナー) アルト・サロマー/足立暁生訳 四五〇〇円
第二種情報処理試験全問題解答集(92秋季版) 二六七九円

東京農業大学出版会 イタリアの農業と文化 大谷 忠 一六〇〇円

Morphological and Phylogenetical Study on the Larvae of Pleurostict Lamellicornia in Japan 澤田 玄正 七六〇〇円

入学試験問題と解答例 東京農業大学出版会編 一三〇〇円
東京農業大学(平成四年・三年度)

東京農業大学出版会編 一三〇〇円

東京農業大学出版会編 一三〇〇円

東京農業大学出版会編 一三〇〇円

東京農業大学出版会編 一三〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

生への闘争―闘争本能・性・意識―

W・J・オング／高柳俊一・橋爪由美子訳 三二九六円

レンブランドとイタリア・ルネサンス

K・クラーク／尾崎彰宏・芳野明訳 二九八七円

十九世紀パリの売春

パラン・デュジャトレ著／コルバン編／小杉隆芳訳 二五七五円

ヘーゲル左派―思想・運動・歴史― 石塚正英編 三三九九円

科学と懐疑論 J・ワトキンス／中才敏郎訳 三三九九円

結晶と煙の間―生物体の組織化について―

H・アトラン／坂上 脩訳 三六〇五円

編Iへものと人間の文化史68―I― 伊藤 智夫 二四七二円

編IIへものと人間の文化史68―II― 伊藤 智夫 二四七二円

スレイマン大帝とその時代 A・クロー／濱田正美訳 四四二九円

子どもの権利条約の研究へ法政大学現代法研究所叢書12

永井憲一編 三六〇五円

権力の批判―批判的社會理論の新たな地平―

A・ホネット／川上倫逸監訳 四四二九円

ディオニュソス―大空の下を行く神―

M・ドゥティエンス／及川馥・吉岡正敏訳 一七五一円

変化の原理―問題の形成と解決―

P・ワツラウィック他／長谷川啓三訳 二二六六円

メディアの理論―情報化時代を生きたるために―

F・イングリス／伊藤誓・磯山甚一訳 三三九九円

さいころへものと人間の文化史70 増川 宏一 二九八七円

失われた美学―マルクスとアヴァンギャルド―

長田謙一・他訳 三一九三円

デザイン論―ミッシェン・ブラックの世界―

M・ブラック著、A・ブレイク編／中山修一訳 二九八七円

生き残ること B・ベテルハイム／高尾利教訳 五九七四円

重大な疑問―懐疑的省察録―

E・シャルガフ／山形和美・小野功生・他訳 三九一四円

■放送大学教育振興会 (○印はビデオ・ソフト)

「教師教育ビデオ教材―いづれも放送教育開発センター編印刷教材10冊をふくみ定価各一九〇〇〇円」

○特別活動・生徒会活動―3年生を送る会― (30分)

○特別活動・学年活動―学級委員会と2年まとめの会― (55分)

○特別活動・クラブ活動―2中野球部の場合― (40分)

○特別活動・学級活動―2年4組誕生― (30分)

○特別活動・学級活動―学級開き― (25分)

■明星大学出版部

中国語基本語用例辞典 明星大学中国語研究会編 三五〇二円

■早稲田大学出版部

西欧デモクラシーの挑戦―政治と経済の間で―

真柄 秀子 三五〇〇円

行政の構造〈行政の理論2〉 片岡 寛光 三八〇〇円

二つの大戦のはざま―世界経済の危機・民主主義の危機・

社会主義の危機― O・パウアー／酒井農史訳 七〇〇〇円

世界のエイジング文化―大衆長寿時代への道しるべ―

浜口晴彦・坂田正顕編著 二五〇〇円

財政から見た早稲田大学―明治・大正・昭和―

染谷恭次郎 五〇〇〇円

エジプト・イスラム都市 アル・フスタート遺跡

桜井清彦・川床陸夫編

六〇〇〇円

家と家父長制（シリーズ比較家族Ⅰ）

永原慶二・住谷一彦・鎌田浩編

三六〇〇円

比較宗教哲学への道程

水野祐著作集 全10巻 小山 宙丸

六〇〇〇円

第1巻 日本古代王朝史論序説〔新版〕

叢書 ワセダ・リブリ・ムンディ

四五〇〇円

ドイツの政治―連邦制国家の構造と機能―

大西健夫編

二五〇〇円

ドイツの経済―社会的市場経済の構造―

大西健夫編

二五〇〇円

ドイツの社会―民族の伝統とその構造―

大西健夫・U・リンス編

二五〇〇円

早稲田大学蔵資料影印叢書

第47巻 朱筆書入れ江戸芝居絵本番付集(一)

鳥越文蔵・菊池明・林京平編 一八〇〇円

早稲田文学（第二次）復刻版 全13巻

第7巻（明治45年1月号〜大正元年12月号）

第8巻（大正2年1月号〜大正2年12月号）

第9巻（大正3年1月号〜大正3年12月号）

第10巻（大正4年1月号〜大正4年12月号）

■名古屋大学出版会

子供の教育の歴史―その生活と社会背景をみつめて―

江藤恭二・篠田弘・鈴木正幸編

二二六九円

現代日本語コース中級Ⅰ《聴解ワークシート》

名古屋大学言語文化部日本語学科編

五〇〇〇円

商業試験

R・カンテイロン／津田内匠訳

三六〇五円

現代日本語コース中級Ⅱ《聴解ワークシート》

名古屋大学言語文化部日本語学科編

五〇〇〇円

近代ドイツの辿った道―ルターからヒトラーへ―

A・J・P・テイラー／井口省吾訳

三六〇五円

中世の夢

ジャック・ルゴフ／池上俊一訳

二八八四円

環境を考える

名古屋大学公開講座委員会編

二〇〇〇円

江南デルタ市鎮研究―歴史学と地理学からの接近―

森 正夫編

五九七四円

■京都大学術出版会

La Révolution française et la Littérature

中川久定編

四八〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

白頭山への道

第一回白頭山国際共同調査団編／沢 勲監修

二七〇〇円

■関西大学出版部

中国語文法学史草稿

イブン・ジュバイル 旅行記

技術と労働問題

産業構造の転換と中小企業

インド憲法

―大阪における先駆的展開―

アジア太平洋経済の成長と変動

経済データベースと経済データ・モデルの分析

鳥井克之編

藤本勝次監訳

西岡 孝男

上田 達三

孝忠 延夫訳

五〇〇〇円

六五〇〇円

二〇〇〇円

九〇〇〇円

五五〇〇円

三〇九〇円

三〇九〇円

三〇九〇円

三〇九〇円

三〇九〇円

濱砂敬郎・時永祥三編 三三九九円

善の至高性—プラトニズムの視点から—

I・マードック／菅豊彦・小林信行訳 二〇六〇円

諸宗教の倫理学—その教理と実生活—第1巻 性の倫理

M・クレッカー&U・トゥヴォルシユカ編／花田監 二四七二円

公共経済学問題50選

有吉 範敏 一六四八円

イギリス行政訴訟法の研究〈北九州大学法政叢書11〉

ナシヨナリズムと現代(改訂版)〈北九州大学法政叢書6〉

航空計器入門(第三版)

九州大学七十五年史 通史・別巻 秀嶋 卓 三六〇五円

The Journal of Rehabilitation Psychology, Special Edition

DOHSA-HOU 日本リハビリテーション心理学会編 七二一〇円

ドイツ手工業者とナチズム(第二版) 鎗田 英三 四一三〇円

Impact Fracture of Polymers—Materials Science and Testing

Techniques Editors K. Takahashi & A. F. Yee 一〇三〇〇円

Biological Control in South and East Asia

日中会計・統計制度の比較〈日中共同シンポジウム〉

西村明・張以寛共編 三〇九〇円

広瀬義躬編 一五〇〇円

● 大学出版部協会のキャッチフレーズ

これまでブックフェア等の際に協会ブースに掲げられてきたキャッチフレーズ《知識を広めよ深く深く》は、一八七八年、ジョンズ・ホプキンス大学の総長ダニエル・ギルマンが、出版部開設にあたってその理念を語った言葉である。そこで我が大学出版部協会でもオリジナリテイ豊かなキャッチフレーズを掲げようと、加盟大学出版部の全役員、職員に呼びかけたところ五十一編が集まりました。一部を紹介します。(順不同)

- ・ 大学と社会を結ぶ、学術出版のネットワーク
- ・ 知がさわぎでしたら——大学出版部協会
- ・ 時代をみちびく知識を未来へ
- ・ あなたの知が騒いだら、大学出版部のこの一冊
- ・ 過去を積み・未来をひらくこのページ
- ・ 21世紀への知性をひらく
- ・ もっと広く、もっと深く、もっと濃く
- ・ 学問・書物・市民の広場／本が作るユニヴァーシティ
- ・ あなたとともに21世紀を拓く大学出版部
- ・ 学術文化を出版からサポートする
- ・ あなたが作るカリキュラム——大学出版部の本
- ・ 書物を開く／開かれた大学がある
- ・ 知性のハーモニー、大学出版部
- ・ よく読むことは、よく知ることだ
- ・ ハイグレードインフォメーションの発信源
- ・ 学問・科学の最前線と町・暮らしを結ぶ／UPネットワーク
- ・ 学問をアクセスする大学出版部

▼ぶら下がり健康器——では無い。句読点が行頭に来てしまった場合、それを前行末尾の版面外にもってくる組み方を「ぶら下がり」と言う。I書店、あるいは同社の主力印刷所であるS舎の発案によるとか聞いたことがあるが、正確なところは知らない。いずれにせよ、この「ぶら下がり」に代表されるような句読点や記述記号の禁則処理のあり方を考える研究会（のようなもの）があってもよいのではないか、という提案である。

▼電算写植の長所はあらためていうまでもないが、それが同時に短所でもあることが少なくない。禁則処理もそのひとつだ。活版の時代には行末禁則を追い出した場合、普通は一文字の四分の一、ていねいな印刷所でも八分の一の字間アキで処理していた。これなら素人目にはともかく、慣れればすぐにわかる。ところが、電算の場合には一行全体の字間を均等に割って処理するから、まず気がつかない。体裁から言えば大変結構なことだが、そのために不都合も起こ

る。——責了間際に著者が文章を削除してきた。——図版との対応関係から、行送りは絶対にしたくない。——著者の了解のもとに、言い回しを多少変えて何字か追加させてもらう。——これで何とかなりそうだ。——そこで責了。——ところが刷り上がって見れば、せつかくふやした文字は禁則処理が生み出した空地に吸い込まれてしまい、

●製作の現場から

ぶら下がり 研究会の勧め

最終頁まで見事に行送りされていた。——というようなことが起こる。索引があったりすれば悲劇はさらに大きくなる。

▼初期設定によって一括処理が可能であることも諸刃の剣となる。句読点や括弧類に加えて、ルビ付き語句の分割禁則が設定され、さらにドイツ語の長大な単語をハイフオンション処理するソフトが組み込まれていな

いなどということになると、版面は過疎の量観を呈する。せめてその前の何行かにわたって字割りしてくれば何とかかなるのだが、直前の行で処理するよう設定されているかぎり、シリコン頭のコンピュータは例外を認めようとししないのだ。

▼というように、電算の禁則処理には多々問題がある。だからこその「研究会の勧め」なのだ、とりあえず私見を述べる。

禁則対象は選択の必要がある

▼やっかいな問題をひきおこす禁則処理は少ない方がよい。ところが実際には、活版にくらべて手間がかからないから、何でも禁則にしたがる傾向がある。したがって発注する側も、印刷所まかせ、機械まかせにするのではなく、その印刷所の機械はどんな禁則処理ができるのか、どんな禁則処理をしないことができるのかを知る必要がある。その上での選択と明確な発注によって、ずいぶん仕事やりやすくなるはずだ。

▼さらに、禁則処理を出来るだ

け少なくするために、カギカッコやパーレンと句読点の合字が考えられてもよいと思う。そうすべきだというのはない。そのぐらゐの発想があってもよいということだ。

禁則処理されていることが明確でなければならぬ

▼といっても、活版時代の四分割り、八分割りに戻すのでは意味がない。そうではなく、校正紙の版面外に、正規の字詰めより何字多いか少ないかを表示するといった方法はできないものか。たとえば2字少ない場合には-2、半字分多い場合には+0.5というように。これはおそらく、コンピュータにとっては得意技術に類することだろう。

▼ワープロ（専用機）の禁則処理についても一言。括弧類がぶら下がりになったり、追い出した後が空白になったり、あまりにも大雑把な機種が多すぎる。コンピュータ業界の認識不足が感じられるといったら言い過ぎだろうか。（組版オタク）

大学出版部協会加盟出版部一覽

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
聖学院大学出版会	〒362 埼玉県上尾市戸崎1番1号 TEL. 048-781-0031 FAX 048-726-2962
慶應通信	〒108 東京都港区三田2-19-30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2-16-5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6-1-1 TEL. 0427-28-3213 FAX 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742-1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒151 東京都渋谷区富ヶ谷2-28-4 TEL. 03-5478-0971 FAX 03-5478-0870
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7-3-1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2-2 TEL. 03-3291-9665 FAX 03-5280-3563
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 TEL. 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見2-17-1 TEL. 03-3237-1731 FAX 03-3237-8899
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1-14-1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2-1-1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1-103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL. 075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6-10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3-3-35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第15号)'92夏 平成4年9月1日発行 発行者 大学出版部協会

〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954

頒布価格100円(本体97円) 干共